

SINAPIS

社会活動センター・シナピスは平和を実現する使命に向けて生きる人びとを応援します

月刊シナピスニュースレター

Vol.
114

2025. 11

年間テーマ ～戦後 80 年、平和の巡礼者として、祈り、行動しよう～



10月19日(日)大阪高松大司教区カテドラルで開催
INTERNATIONAL DAY～外国人が暮らしやすい社会は日本人にも暮らしやすい～

地上でもっとも小さいといわれている種子、それがシナピス(からし種)です。
イエスは神の愛がすべての人におよび、互いに尊重し合い、
愛し合うように願って平和の種をまき、
やがて鳥が巣をつくるほどの大きな木になると約束しました。

カトリック大阪高松大司教区
社会活動センター・シナピス

TEL/06-6942-1784 FAX/06-6920-2203
Email/sinapis@ostk.catholic.jp
ホームページ/<https://sinapis.osaka.catholic.jp/>



戦後80年 司教団メッセージ 「平和を紡ぐ旅 ― 希望を携えて―」 祈りと行動へ！

外国語司牧担当 デンニ・ワユディ神父

戦後 80 年司教団メッセージ「平和を紡ぐ旅 ―希望を携えて―」を読みますと、それは教会の歴史的責任と未来への希望を深く見つめ直す呼びかけであり、社会との関係においても重要な意味を持つことが分かります。日本カトリック教会と社会との関係におけるこのメッセージは以下の五つのポイントにまとめられます。

1. 過去の反省と回心。教会は戦前・戦中において、国家体制に迎合し「正戦論」によって戦争を支持した歴史を持つと認識しています。この過去を真摯に受け止め、回心し、平和の実現に向けて新たな歩みを始めることが社会的責任とされています。
2. 若者とともに歩む平和の巡礼。戦争体験者が減少する中、若い世代に歴史の記憶を継承し、広島・長崎・沖縄などへの巡礼や平和学習を通じて、平和の価値を共有することが強調されています。教会は教育・文化活動を通じて、社会全体に平和の理念を広める役割を担っています。
3. 核兵器廃絶への取り組み。日本被団協のノーベル平和賞受賞を契機に、教会は核兵器の非人道性と倫理的問題を訴え、核兵器禁止条約の批准を日本政府に求めています。社会に対しては、核兵器廃絶の声を広げるための対話と連帯を呼びかけています。
4. 沖縄と南西諸島へのまなざし。教会は沖縄戦の記憶と現在の軍備強化に対して懸念を示し、非暴力による平和の訴えを支持しています。社会に対しては、戦争の準備ではなく平和の構築を選ぶよう促しています。
5. 聖書的平和（シャローム）の実現。平和とは単なる戦争のない状態ではなく、人間・自然・神との調和であると教会は説いています。社会においても、経済・環境・人権の分野でこの「シャローム」の理念を実現することが求められています。

このメッセージは、教会の内省と社会への働きかけを通じて、戦後 80 年という節目にふさわしい「祈りと行動」の道を示しています。次世代とともに歩む平和の巡礼は、宗教の枠を超えて社会全体に希望と責任を呼びかけるものです。



INTERNATIONAL DAY2025

～外国人が暮らしやすい社会は 日本人にも暮らしやすい～

雨の予報にやきもきした今年の INTERNATIONAL DAY ですが、最後まで気持ちの良い天気の中で、過ごすことができました。「国際ミサ」には、1500 人を超える参列がありました。多国籍料理に、さまざまな出店、そして後半は、ステージと一体になったのディスコタイム。例年通り、大盛り上がりの日でした。

ボランティアさんの感想(大学生)

今回、様々な国籍の方とご一緒に感じたことは、言語が違ってても身体で楽しさを表現することでみんなが一つになれることです。特に終盤になるにつれて、ステージの出演者以外の観客の方々もみんな一つになってダンスした姿が今でも残っています。

そう考えると、「言語の違い」なんて小さく感じませんか？その違いにより交流を避け、それが故に偏見が生まれる小さな世の中ではなく、ダンスや歌うことなど、どの国でもみんなが一つになれるようなこの気持ちを胸に留めたまま人々が関わることが出来ると、きっと外国人も日本人も住みやすい世の中になるのではないのでしょうか。

今回の IND を通して外国人のみなさんから、この気づきを教えて頂きました。この気づきや、楽しかった思い出を今回の参加者だけで共有するのではなく、もっと周りの人々に広めることが、今私たち参加者が一番すぐに実行に移せるアクションだと思いました。

また、高校生ボランティアのおかげで準備や片付けがほんとうに早く終わり、活気を感じました。彼らからたくさんインスピレーションを受けました。このような国際交流の機会に積極的に参加してくれた、人びとにやる気や刺激を与えられる高校生が、もっと増え、IND がさらに活気あふれるビッグイベントとなれば、より外国人も日本人も過ごしやすい社会の実現に近づけると感じました。

ボランティアさんの感想(高校生)

*外国の人は日本に思ったよりもたくさんいるんだな、と感じました。
皆さんとても優しく、こういったコミュニケーションの場がとても嬉しいです。

*外国人の方とコミュニケーションをとるのが難しいのではと思い、少し尻込みしていましたが、意外とコミュニケーションがとれて安心しました。

*全力で楽しめました。また、普段食べることの出来ない料理などが沢山あって本当にいい経験になりました。

*様々な国の方や色々な国の屋台があって、多様性に富んでいて、世界の広さを感じた。

トランプの平和 —— 自由なガザの消滅

シナピス運営委員 にしぐち のぶゆき 西口 信幸

人の子が来るとき、果たして地上に信仰を見いだすだろうか。

ルカ福音書 18:8より

権力者の意向に沿って歴史が捏造されていく過程をNHKの報道を通して見てきた2年ですが、10月は次々と事実がすり替えられることに気分が悪くなる1ヶ月でした。知らないうちに弱者を歴史から消し去る共犯者になってしまっている私たち、「知らなかった」で済むのでしょうか。報道の中にも矛盾や綻びはあり、「はて？」と思うこともあるはずです。

ガザでは虐殺、飢饉、拷問、民族浄化と、目を覆うような残虐な行為が明らかになりました。西岸地区でも入植者やイスラエル軍による略奪、暴行、拉致など、法治国家とは思えない行為が日常化しています。

起きていることから素直に考え、歴史の事実を冷静に判断する力、その場しのぎで為政者の広報機関となった報道の裏にある「事実」を見つめる目が求められています。

平和が戻ったと思っておられるみなさん、「停戦」という名の民族浄化に騙されないでください。

「停戦」実施の中で明るみに出た多くの非人道行為を、紙面の関係でお伝えできないことは断腸の思いですが、ここでは、トランプの停戦合意が実施される中で、アメリカとイスラエルが駆け引きしながら、新たなガザの植民地化が展開されようとしていることをお伝えします。

★ トランプの「平和2025」—— ジェノサイドを不問にする儀式

トランプの画期的な停戦とは何だったのか？10月10日までのノーベル平和賞遊びと、リビエラを早く見たいという焦りから、延々とジェノサイドを続けるネタニエフに終止符を打たせることでした。ノーベル賞はハズレでもセレモニーだけはきちんとおこなって、「パレスチナ国家承認」と「ジェノサイド認定」を叫ぶ世界に終焉を告げることに成功しました。フランスも2国家解決への道を閉ざされてしまいました。ガザへの連帯を閉ざす儀式にG7、アラブ諸国の居並ぶ中、日本の石破さんがいなかったことは救いでした。ガザ戦争の終結宣言で、736日に及ぶガザの破壊と殺戮はなかったことに、5兆円もの武器供与でこのジェノサイドの協力者であるアメリカもお咎めなしです。国連の存在も無視されてしまいました。



★ 「撤退」の真の狙い——アメリカ主導のガザ再開発

この停戦でトランプが求めるものは再開発です。イスラエルの求める併合、民族浄化と目指すところは多少違いますが、ガザの主権を奪う土地収奪の促進です。そのための実行策が「撤退」でした。軍の撤退だけではなく、新たな占領を意味しています。植民地主義による、ガザの自決権の無視であり、国際法の無視です。ガザ市民も含めてそこにいる者はハマスという認識の下、地図上で勝手に線引きされて、「新ガザ」は50%を切るよう設定されており、さらに過酷な「天上のない監獄」での新たな大惨事が始まります。

★ 「黄色い線」——ガザの再開発地域と収容所を分ける撤退ライン

人口密集地のガザ市の土地収奪を一旦諦めて、国土の52%を占めるよう、イスラエル軍の撤退ラインは居住区を無視した地図上にひかれた「黄色い線」です。ガザの砂丘の境界とほぼ一致しており、東部の肥沃な土壌にある農業地域の大部分を失います。環境も厳しい、インフラも設置できない、砂地ばかりの海岸を、新たな「ハマス収容所」としようとしています。

「黄色い線」の外は戦闘ゾーンに

イスラエルは停戦ラインを戦闘地域としています。多くの人の住居があり、特定もできないラインをまたいだ市民を、合意違反として毎日、10人以上、銃殺しています。

「黄色い線」の外の家屋を破壊

南部のラファ市内の残った家の破壊活動の際、ブルドーザーが自軍の不発弾に触れて爆発し、兵士が2人死亡しました。ハマスによるものと誤認したイスラエル軍は停戦違反として150発の爆弾を投下して、44人の市民を虐殺してしまいました。アメリカからの提言で、それ以降、爆撃は控えています。イスラエル政府からの謝罪はありません。

「黄色い線」の上に黄色のブロック

停戦1週間後、イスラエル軍は地図上の「黄色い線」上に、長さ3.5メートルのコンクリートブロックを設置し始めました。人々がそこから出ることができないことの目印としています。

「黄色い線」の外に反ハマス武装集団

イスラエルの武器支援を受けた武装集団が、この地でハマスから逃れた人々を武力統制するため、待機しています。



★ アメリカ主導の統治体制の構築に向けて——南アのようなアパルトヘイト

ワイトコフ特使、娘婿クシュナー、ヴァンス副大統領がイスラエルを訪問し、第2段階のガザ併合に向けての動きを加速しています。アメリカはイスラエルが支配する地域だけに資金を提供すると宣言し、「黄色い線」の中は放置しようとしています。これは援助ではなく、絶滅戦略です。「ガザ人道財団」のように再建を抑圧の道具に変えています。「パレスチナ人に『行く場所、仕事を得る場所、住む場所』を提供するための再開発をする国際的な部隊「平和委員会」によって統治されることになります。地獄のハマス収容所に留まるか、ハマスを捨てて占領民として生きるかの選択を迫られることになります。

★ 壊滅的な国際機関の動き——世界はどう生きていくのか？

UNRWAは存在しないものになり、物資の搬入は生存限界の15%しか入らず、飢餓が進行する中、人々は何が起きているのかさえ理解できません。世界中が放心状態にあります。かろうじてICJが勧告的意見を出しましたが、国連総会や加盟国の動きに繋がっていません。世界の宗教指導者でさえ称えたトランプの平和、世界の責任は重大です。

この2年間で原爆14個分、20万トンの爆薬が使われ、ヒロシマ同様にガザ全土が全焼しました。瓦礫の下に、まだ多くの女性と子どもたち、1万人の消息不明者が眠っています。遺体の回収のための重機もありません。2万人の手足が無い人、緊急治療が必要な人もガザから出ることを許されていません。それでも、ミサイル、ドローンの音が止んだ今、ガザの人たちは勝利を祝いました。「今、生き残ったことで、存在を消そうとする暴力に克ち勝ったことを祝って！」

大漁 金子みすゞ
朝焼け小焼だ、大漁だ
大羽鰹の大漁だ。
浜は祭りの
ようだけど、
海のなかでは
鰹のとむらい
するだろう。

キリストの生まれた聖地、旧約の時代からそこに住み続けてきた人々は、どんな民族の名前であれ、神から選ばれた民でした。辺境の地にあって、『弱者とともに生きる』という神の教えに従って、土地に生きることを通して、自分ファーストの世界に語りかけています。

「病者・障がい者とともに歩むミサ」
YouTube に参加して



たけざき ゆうこ
嶽崎 裕子

「病者・障がい者と共に歩むミサ」に、私は第 1 回目より関わらせていただいておりますが、癌発症後、昨年は参加できずに、とても寂しい思いと孤独感に陥りました。今年は、玉造よりも遠い高松市の桜町教会となり、絶対に参加出来ないと疎外感にさいなまれておりました。が、YouTube 同時配信があることを知り心待ちにしていました。

私は、ミサに YouTube で参加したことで、ミサで教会と一致できていること、心からイエスと一緒にであることの実感を味わえました。心から感謝です。

ミサに参加できない苦しみを覚えている者にとって、ご聖体をいただけなくても、YouTube ミサに参加できることは、大きな喜びです。

最後の荘厳な祝福の中で、「神はあらゆる困難を取り除くわけではありません。でも、取り除く力を与えてくださいます。その力は、私たち一人ひとりが互いに支えあうものである」という、メッセージをいただけたのも、力強く感じられました。

私のように、参加したくても参加できない病者・障がい者・高齢者の方にも、ミサの参加の喜びと共に、次への光のメッセージをいただき、教会とのつながりを感じ、心の支えとなって歩むことができるようにと、願います。

せめて、教区主催のミサを YouTube で発信していただけることで、病者・障がい者・高齢者・その他の諸々の理由でミサに参加できない方々と教会の繋がりが強くなるように思います。

教区ミサのYouTubeミサ同時配信を切に願います次第です。



シナピス事務局 おおもり ゆうじ
大森 雄二

あずか
与って温かい気持ちになる、今まで味わったことのない一体感を感じたミサでした。「ともに」というテーマがはっきりあり、普段のミサより明らかに障がい者の参加の割合が多くて、サポートする人々の動きがはっきりと目に見えたからかもしれません。

声を出せない方が、手話で聖歌を歌っている姿を私は初めて見ました。じーんとききました。両手を上げてぶらぶらさせる「拍手」のポーズは、すぐに真似をしたくなる気持ち良さげなものでした。

交流会でのきもと さかい
木本さん(堺教会)の言葉が心に残っています。「挨拶だけは淋しいです。なんでも良いからもう少し何かおしゃべりしたいんです」。手話が出来なくても、ペンとメモを出して彼女と筆談するか。気持ちのこもった言葉に応えたいと思いました。

交流会を任されたお二人の青年(教会では！)の笑顔と優しい語りが、ミサ後の聖堂を最後まで温かい空気で満たしてくれました。教わった手話は、もうだいが怪しい感じですが、通勤時、駅のホームや通路では、ダイヤの乱れなどの情報を得られずに困っている様子の方がいないかきよろきよろしています。

「正義と平和全国集会 2025 仙台大会」の報告①



10月11日～13日 於：^{もとでらこうじ}元寺小路教会

シナピス事務局 ^{おおもり ゆうじ}大森 雄二

50年前の1975年に第1回が開かれた「正義と平和全国集会」は、今年で42回目でした。カトリック中央協議会の組織改編によって、来年以降、どんな全国集会が続くことになるのか。そんな不安を吹き飛ばすかのように、大会には5名の司教方と全国から多くの参加者が集いました。

東日本大震災による痛みと破れ、新たな出会いや助け合い、それらが積み重なった復興の現実が今大会の芯としてしっかりとあると感じました。

基調講演で幸田 ^{こうだ かずお}和生司教(カリタス南相馬代表理事)は、福島原発事故後の避難の過酷さについて語りました。屋内退避指示区域でも「支援が入らないから避難するしかなかった」現実や、「すぐに逃げられるようにしておきなさい(いつまで続くかはわからないけれど)」という緊急時避難準備区域など、生活の現実を無視した決定に住民が振り回されこと。そして除染が終わり帰還可能になってからは、いかに住民たちが引き裂かれたかを強調されました。

特に心に残ったのは「災害や原発事故を乗り越えたいのちが戦争によって奪われることがあってはならない」との言葉です。「戦争のほうがマシ」と思わせるほどの社会・経済状況を作らないこと。平和のために対話の可能性を信じ続けること＝「時間は空間にまざる」(フランシスコ教皇の言葉)。「たとえ殺されても戦争にノーと言う」(^{せとうち じゃくちよう}瀬戸内 寂聴)姿勢を私たちの役割として示されました。

最初のシンポジスト・^{たてわき あきひろ}館脇 章宏さん(「みやぎ脱原発・風の会」事務局長)は、はじめに、^{おながわ}女川原発(宮城県)が、津波の高さがあと80センチ高ければ、全電源喪失に追い込まれていたことを教えてくださいました。「第7次エネルギー基本計画」(25年2月)で、原発回帰を鮮明にした政府は、「原発が安い」「環境に優しい」と宣伝しますが、本当にそうなのか、反証を示されました。「子どもたちの子どもたちの子どもたちのために」と考えた時、「核のゴミ」や廃炉の問題を考えただけでも原発に未来がないのは明らかで、「原発依存社会は金まみれ」(^{かまた さとし}鎌田 慧さん)で、「どこまでも差別的」(^{こいで ひろあき}小出 裕章さん)であると訴えられました。

二人目のシンポジスト^{なかすじ じゅん}中筋 純さん(「おれたちの伝承館」館長)は、今年の平和月間で神戸地区が講師としてお招きした方です。ヒロシマの被爆樹木を伝承館に植林したことから話しはじめ、「初めに何が起きて、復興の中で何が起きているのかを忘れてはいけない」と強調されました。

「積み上げられた黒いフレコンバッグには何が詰められているのか。広大な更地はなぜそうなのか。そこで問われているのは私たちの想像力です」と語り、「被災地の当事者に代わって、当事者の悲しみ・痛み・失ったもの・悔しさ・絶望を想像し、私たちが声を上げなければ、世界は変えられない」と語りました。

最後に、9月17日に開かれた「311 子ども甲状腺がん裁判」での、原告8番(いわき市出身の20代女性)の証言を全文朗読して話を終えられました。(12月号に続く)

名古屋入管で死亡したウィシュマさん…もう一つの裁判

フリーライター おおもと あさみ
大元 麻美



名古屋出入国在留管理局（以下・名古屋入管）の収容施設で、2021年3月6日、脱水症と栄養失調によりスリランカ人女性の元留学生、ウィシュマ・サンダマリさん(33)が死亡した。何らかの事情で「留学」の在留資格を失ったウィシュマさんは、名古屋入管に収容され、施設内で体調を崩したが、適切な医療が受けられず、収容からわずか半年余りで死亡したのだ。

ウィシュマさんの死の責任を問う国家賠償請求訴訟（以下・国賠訴訟）が名古屋地方裁判所で始まって3年以上が経過し、12月4日からいよいよウィシュマさんを担当した医師等への証人尋問が始まる。国賠訴訟は山場を迎えているが、裁判長は今のところ、名古屋入管の局長や職員、看護師の証人尋問を考えてはいないため、単なる医療裁判になってしまうことが懸念されている。

そうした状況下、ウィシュマさんをめぐるもう一つの裁判が9月30日、東京地方裁判所で始まった。この裁判はウィシュマさんが死に至った全容を解明する重要な証拠として、彼女の亡くなるまでの居室での様子を映した約2週間分の防犯カメラのビデオ映像について全面開示を求めるものだ。実はこのビデオ映像は295時間分あるのだが、上記の国賠訴訟で被告側が開示したのは全体のたった2%にあたる5時間分だけ。290時間分は開示されないままになっている。

現在開示されている5時間分だけでも、うめき声を上げるウィシュマさんの姿が映っている。

2021年2月23日、「病院連れて行って。お願いします」と命乞いするウィシュマさんに、職員は「私の力では『パワー、権力』ないからできない」と言い放つ。

2月26日、ウィシュマさんはベッドから落ちる。2人の女性職員は、ウィシュマさんをベッドに上げることができず、床に放置したまま「朝まで我慢してね」と言って立ち去ってしまうありさまだ。

名古屋入管局長は今年3月26日、残りの290時間について、①映像に個人情報が入っていること、また②公共の安全と秩序、収容業務に支障をきたす恐れがあること—を理由に開示しない決定を下した。これを受けて、遺族が今回の新たな訴訟を決断したのだ。

被告である名古屋入管が主張する「開示しない理由」については、ビデオ映像にマスキング処理（ぼかしを入れるなど）を施せば済むことであるが、入管側は第1回口頭弁論（9月30日）のために提出した答弁書で、次のように主張をしている。

名古屋入管において、ビデオ映像にマスキング処理を行うことのできる「動画編集ソフトが導入されたパソコンは1台しかないため、かかる作業は一人で行わざるを得ない。したがって、国家公務員の勤務時間を前提にすると1300日間以上を要することになる」。つまりマスキング処理に3年かかるから開示できないと言っているのだ。

この第1回口頭弁論後の報告会では、スリランカにいるウィシュマさんの母親の悲痛なメッセージが紹介された。

「母親に、娘(ウィシュマ)の最後の姿が映った映像を渡せない理由は、ただひとつだけです。そこに、あまりにも残酷な場面が映っているからです」。

これまで全国の入管収容施設では大勢の死者を出してきた。ウィシュマさんのビデオ映像は、拷問装置としての「入管収容」の実態を解明する重要な証拠になる。どちらの裁判も、傍聴席を埋め尽くして、市民がこの入管に関する裁判を注視していることを表明したいものだ。

「国賠訴訟」 期日予定

場所：名古屋地方裁判所(第2号法廷)

12月4日(木) 午後2時30分～4時30分(庁内医師の証人尋問)

12月11日(木) 午後2時30分～4時30分(庁内医師の証人尋問)

12月24日(水) 午前10時30分～ 午後4時30分(被告協力医師の証人尋問)

2026年

1月14日(水) 午前10時30分～ 午後4時30分(原告協力医師の証人尋問)

1月28日(水) 午前10時30分～ 午後4時30分(原告協力医師の証人尋問)

※ 傍聴券は開廷の約1時間前に配布される予定です。

※ 詳細はウェブサイト「CALL4」で「ウイシュマさん名古屋入管死亡事件」で検索し
「期日予定」で確認できます。

「ビデオ全面開示訴訟」(保有個人情報不開示決定取消等請求事件)

第2回口頭弁論の期日予定

場所：東京地方裁判所(第419号法廷)

12月18日(木)午前11時～

※開廷の約1時間前に傍聴券が配布される可能性があります。



写真説明＝9月30日の「ビデオ全面開示訴訟」第1回口頭弁論の後、
東京地方裁判所内の司法記者クラブで開かれた記者会見。

中央はウイシュマさんの妹のポールニマさん



京都ノートルダム女学院高校の生徒たちが難民に出会って動き出す

京都ノートルダム女学院高校では、生徒自らが課題を決めてワークショップを開く授業があるそうです。このたび、3年生の生徒たちが「日本の難民問題」に取り組んだので、実際にやってみた手ごたえを尋ねてみました。

1. なぜ難民問題に取り組もうと思いましたか。

私たちはグローバルワークショップでの課題を決める際、黙想会でビスカルド^{あつこ}篤子さんから聞いた難民のお話を思い出しました。日本の難民認定率は世界の国々と比べて非常に低く、認定を受けられず困っている人が沢山いることを知り、テーマに選びました。

2. シナピスへ出向き、実際に難民に会ってどんなことを感じましたか。

温かさです。難民の人たちは凄く大変な経験をして、心を閉ざしてしまっているのでは、お話出来るのかと少し心配でした。しかし、カフェに入ると初対面の私たちに明るくフレンドリーに挨拶してくださり、郷土料理まで頂けてとても楽しい時間を過ごせました。実際に会うことで何か力になりたいと、より強く感じました。インターネット



ットでは分からない生の声を直接聞けて、非常に価値のある時間となりました。辛い経験を抱えながら本国の現状を丁寧に伝えてくださり、一つ一つの言葉に重みを感じました。特に印象に残っているのは「偏見を持って批判するのではなく難民について知ってほしい」「難民は敵ではなく、文化や言葉が異なるだけで同じ人間である」という強い願いの言葉です。

この言葉を通して、理解や共感の大切さを改めて実感しました。

3. 学校では1年生から3年生に向けて3回にわたり授業を展開しました。どうでしたか。

私たちは 知ることが何よりも大切と考え、「たてわり授業」の時間3回分で難民問題にかんする授業を実施しました。1回目は事前学習として基礎知識を学んでもらい、2回目はビスカルドさんを招いて 難民問題の“リアル”に触れる機会を設けました。そして3回目では「難民支援のあり方」についてロールプレイを通じたディスカッションを行い、「私たちに何ができるのか」一緒に考えました。

最初は、皆が関心を持ってくれるかどうか不安もありましたが、特にビスカルドさんをお招きした回では、多くの生徒が積極的に質問をして、配布した紙には学んだ内容がびっしりと書き込まれ、とても嬉しく感じました。授業後には、先生や在校生・卒業生から「本当に良い機会になった」「とても勉強になった」という声が多く、準備や進行で大変なことも多くありましたが、この企画を実行して心から良かったと思いました。私たちの企画に快くご協力いただいた難民の方がたに心より感謝しています。ありがとうございました！

☆いま、難民移住者の置かれた現実について学ぼうとする学校が増えています。この1年だけでも、アサンプシオン国際中学校、大阪信愛学院高校、プール学院高校、愛徳学園高校、大正大学、関西大学、大阪女学院大学、神戸女学院大学で若者たちに触れる機会を頂きました。

また International Day では、平安女学院大学、同志社大学、大阪星光学院高校、ヴェリタス城星学園高校、京都暁星高校の学生や生徒たちが裏方奉仕活動に力を発揮してくれました。次世代に何を伝え残したいか、先生たちの姿勢と意気込みと大らかに、日本の未来は明るいと感じています。



投稿欄 ガリラヤの風

くるみざわしん作『マリヤの賛歌-石の叫び-』からの考察

こおり 香里教会 きたがわ みつひろ 北川 光弘

本作は、従軍慰安婦だった過去を告白した城田^{しろた}すず子さんの自伝を原案に、この著作を繰り返し読む福祉職員^{しふししやく}の存在に着想を得て作られた一人芝居です。

物語はその『マリヤの賛歌』を読み続ける「私」が城田すず子の壮絶な人生に対面するところから始まります。「……私は見たのです。この目で、女の地獄を。」

出演の金子^{かね}順子^{じゆんこ}さんは、全体を通底して「女を二つに分けるな」というメッセージを熱を込めて訴えます。「汚れていない純真な女と汚れた売春婦」「男の性奴隷にされてもいい女と男が守ってやる女」お金を貰っているか否か、売春か否か、男の論理を振りかざしたこの碌でもない二分法の陰に、肝心の加害者は身を隠し日本軍性奴隷制度の被害者たちに罪と恥を押し付ける。かの無謀な戦争からの学びを棄てたこの国の戦後は彼女たちの沈黙に支えられてきました。

漫画家^{こばやし}小林よしのりや東京大学伊藤^{いとう}隆^{たかし}などの論客に代表される「日本人なら黙っている」「黙っているのが美德」「歴史から学ぶことはない」といった主張がマチズモの妄想にしか過ぎないことは、戦闘で精神を病んだ男性たちを襲った戦闘疲労症候群の実態が明らかにされてきた今、反論の余地はありません。男女問わずその経験を吐露できない苦しみは時を経て薄れることはありませんでした。

戦争をやめれば軍隊はいらない。軍人がいなければ戦時性暴力はなくなる。この真つ当な願いを否定するために「(日本人の)沈黙の美德」が作られてきました。アジアの勇氣ある女性たちが証言するようになってなお「無垢な外国人の被害者」という色眼鏡で見る向きは変わらず、先駆けた「日本人」城田さんの証言は注目を集めませんでした。

それでも城田さんは絶えず書き続けました。生死の境で紡ぎ出される、言葉にならない言葉、言葉を超える言葉を。分け隔てなく全ての人間がその体験を創造的に表現できる当たり前の社会環境を取り戻すために、権力が作り上げた文法を取り払い、不公正の例を暴き不当な社会的偏見の犠牲者こそが、珠玉の創造性の持ち主であることを証明する努力を最後まで続けました。

彼女の人生に触れることができれば、男の論理が二分した女性像のいずれでもない自分の性と体を揃えた「女」に「帰っておいで」と世界に訴えずにはいられないでしょう。

「今からその代の人びとは私を幸いな女というでしょう」そのためには石の叫びを聞く耳と絶えず声を上げ続ける口を持たなければなりません。彼女がいかにしてマニフィカトに辿り着いたか、是非とも機会があれば劇場でご鑑賞ください。城田すず子著『マリヤの賛歌』(岩波現代文庫)もお薦めします。

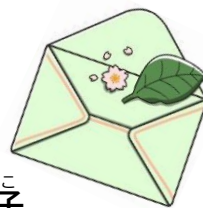
最後に、慰安所という言葉の使用自体に権力への忖度が隠されていることを見逃してはなりません。実状の通り強姦収容所と呼ぶべきです。そして、慰安婦は性奴隷に他なりません。史実を極端にまで控えめに表現した言葉でさえ教科書から消えかけているのがこの国の現状です。

*写真キャプション: サンフランシスコの慰安婦像(朝鮮半島、中国、フィリピン出身の若い女性をそれぞれ表現し、傍らで見守るのは自分の経験を初めて公に話した金子^{かね}順子^{じゆんこ}さん





シナピスホーム便り



事務局 やまだ なおこ 山田 直保子

皆さん、こんにちは。シナピスホームでは、9月27日と10月4日、2週続けてランチが開催されました。

9月のランチはイラン料理。初めてお客様にお出しするランチを作る A さんは、とても神経質な一面があり、自分のやり方がしっかりと確立されている人で、なおかつ日本語があまり話せないのも、伝えることも苦手です。料理は得意な人でも、ランチはみんなで協力して作るというルールなのですが、彼は自分の料理をほかの人に触らせません。それでは一人で大変だし、手伝ってもらいましょうと説得し、みんなで最終的には用意できました。

メニューはシーラーズサラダ、ミルザガセミ(ナスを網で焼いて焼きナスにしてから、トマトや玉ねぎなど野菜やハーブで煮込み卵でとじる料理)、チキンのシチューです。どれもとても美味しく、日本人にもなじみがある優しいお味なのですが、チキ



イラン料理

シチューが特に美味しくて大人気！ 見た目は赤いので辛いのかと思いきや 辛くなくてコクがしっかりありお客さん全員が絶賛してくれました。

A さんはシナピスでの支援期間は短いのですが、以前より知っていて、あまり話したことがなく寡黙なイメージの男性でしたが、今では料理上手、子ども大好きでカフェに来る子どもたちを楽しみに待っていて、来たら大喜びで子どもたちと遊んでくれます。カフェの段取りも神経質な一面をのぞかせながらしっかりと担ってくれ、とても助かっている難民さんです。



中華料理

10月4日のカフェは、少し早いけど「我々がボス・^{あつこ}篤子さんのバースデーをみんなで祝いましょうランチ」でした。前号でお話した中国人一家のご夫婦が篤子さんの為に腕をふるってくれました。料理は夫婦に完全にお任せし、私たちはケーキ作り。甘い物がちょっと苦手な篤子さんの為に、フルーツがたくさんのヨーグルトムースを作りました。興味津々中国一家の末娘と難民さんと共に味見しながら作り、甘くないからとホイップを冷蔵庫から出してくるイラン人がいたり、末娘と一緒にヨーグルトと生クリームを混ぜながら、どんなものが出来るかとても楽しみにして今まで見たことがない笑顔を見せてくれ

たり、ただ普通に調理していく過程で、私は貴重な体験をしているなと気づき、出来上がった時のキラキラ笑顔は絶対に忘れられないものとなりました。

中国人の一家は言葉が通じず、ストレスもすごいでしょ。末娘も中国にいた頃はもっとわがママを言っていていつも笑ったり泣いたり感情豊かに生きていたことと思います。日本に来てからは言葉がわからず、まだ小さいうちに知らない場所で知らない大人たちに囲まれ、たくさんのストレスを抱え、笑顔もあまり見られなかったのですが、この日は声を立てて笑い、難民移住者とケーキが出来上がった時にハイタッチをして嬉しそうだったことが私も本当に嬉しかったです。

ランチのメニューは、^{チンジャオロース}青椒肉絲、卵とトマトの炒め物、チキンときくらげや野菜の炒め物、骨付チキンの4品！どれも本格的でとても美味しいと言っていただきました。難民移住者からもホールケーキや、服や花束など篤子さんにプレゼントがあり、みなでお祝いができて、篤子さんもとても喜んでくれて、笑顔がたくさんのランチとなりました。



ゲームで盛り上がる

事務局こぼれ話

ビスカルド^{あつこ}篤子

「息子に一目会いたい」

前にも紹介したことのある、拘置所に2年も拘留されている人の話です。彼には接見禁止命令が出されているため、一般面会は許可を受けた私しか彼に会うことができません。

私は本人に接見するほか、手紙で交信を続け、本人や家族に依頼された物を送るなどしています。ただ彼のいる拘置所は東海地方にあり、なかなか会いに行けないのが実情です。そのうえ今年8月以降には、事情があって弁護人がつかない状況に陥ってしまいました。

10月のある日、私は彼のきょうだいに呼ばれて名古屋駅へ行きました。そこには年老いた両親が立っていました。息子に会いたい一心で遠い祖国から来日されたということでした。ビザはあと1週間しかありません。面会が実現するにはどうすればよいか、私は知り合いの弁護士さんに相談をし、管轄の裁判所へ行くよう助言していただきました。

さっそく私たちは両親を連れて名古屋から車で1時間かかる裁判所へ行きました。足の悪いお母さんと心臓ペースメーカーをつけたお父さんを見た書記官は、新しく就いた国選弁護人に電話をし、弁護士から両親の面会許可を願い出るようにつないでくれました。「今生の別れになる」と泣く両親と、独りぼっちで拘禁に耐える息子と。どうか想いがかなえられますように。

☆このニュースを印刷する直前に、両親の面会許可がおりました。早速拘置所へ行こうとしたら検察側が抗告し、ストップがかかりました。老親との面会は証拠隠滅の恐れだと??



「乳幼児の難民を助けようキャンペーン」へのご協力ありがとうございました。



8月から10月まで3か月限定で呼びかけたキャンペーン、たくさんの方からご支援をいただき、乳幼児のいる難民の家族におむつとミルクを買うことができました。そのほか赤ちゃんが高熱を出して救急搬送された時の医療費にも使わせていただきました。

立場の不安定な難民の家族は、家賃を払えず居場所を転々とする傾向があり連絡も途絶えがちです。いなくなったと思うと、「助けてほしい」とメッセージが届く、のくり返しです。難民家族の居場所が特定されると、私たちはその地域の国際交流協会と協力体制をつくります。現地で支援物資を揃えてもらい、家族に受け取りに行くよう知らせます。こうして親に就労許可が出るまでの綱渡りが続きます。

また、9月には新たに幼児を含む難民の家族をシナピスで保護しました。今のところ、この家族は自分たちの所持金で生活しつつ、政府から支援金がおりののを待っています。

このたびの皆様からのカンパのおかげで、私たちは落ち着いて「今やるべき支援」に注力できるようになりました。難民申請にかんする立証活動、児童の編入学手続き、入管への同行…。そばの赤ちゃんや幼子が、よく食べよく寝てくれたら支援活動も捗ります。

ご寄付は今後も倏約しながら大事に使わせていただきます。ありがとうございました。

ご 寄 付 御 礼

乳幼児の難民を助けよう
キャンペーン終了いたしました

たくさんのご協力
ありがとうございます。



*「事務局こぼれ話」にエピソードを掲載しています。ご覧ください。

引き続き、
活動へのご支援ご協力を
よろしくお願いいたします。



お米、カップ麺、日持ちのする食料品、
のご寄付をお願いします

お電話をお待ちしています！！

☎06-6941-4999



シナピスでは、皆さまから投稿をお待ちしています。

各地区や小教区での取り組み、社会活動にまつわる
ちょっとした日常をお寄せください。

1,000 字程度で写真があったらうれしいです。

✉ sinapis@ostk.catholic.jp にお送りください。

「ニュースレター配布停止」、「点訳版の郵送」を
ご希望の方はシナピスにご連絡ください。

☎06-6942-1784



シナピスホーム（カフェ）
11 月の予定

カフェ：1、8 日

★土曜日の 13 時頃～16 時頃

ランチ：15 日

★土曜日の 11 時頃～16 時頃

★ランチは要予約

☎ 080-8940-8847

あとがき

二つの出会いがありました。うれしいのと悲しいのと。

うれしいのは出張先の仙台で。引越を繰り返す中、エイッと捨ててしまった本をどうしても読み直したくなったけれど、絶版で手に入らない。すると仙台で、この本の読書会をされていた牧師さんと出会い、いただけることに。教会報に、ガザの記事（西口さん）の抜粋までされている牧師さんでした。

悲しい出会いは IND の前日準備で。人懐っこいベトナム人とおぼしき青年が話しかけてきて「僕、自衛隊に入ります。家族を助けたいから」。突然の言葉にあっけにとられた私は「親や神父さんには相談した？」と答えるのがやっと。誰にも相談していないという彼に、「一度、ゆっくり話をしよう。シナピスの事務所を訪ねてきて」と伝えました。優しい感じの彼が抱える現実、自衛隊のリクルートがマッチしてしまう。悲しいで終わらせてはいけない出会いです。（ゆ）

▽▲▽ シナピスの主な活動 ▽▲▽

◆広報活動

- ・教皇メッセージ、司教団メッセージ等
社会活動の指針の伝達
- ・読者と教会内外の社会活動をつなぐ
機関誌としてシナピスニュースを発行

◆大阪高松教区・社会活動委員会との連携

◆学習会研修会の企画

◆こども基金

世界・日本のこどもたちへの援助

◆日本カトリック司教協議会との連携

正義と平和協議会、難民移住移動者委員会、
カリタス、部落差別人権委員会に委員を派遣

◆人権教育の講師を務めるなど教育機関への働きかけ

◆難民移住移動者支援

難民移住移動者の暮らしやすい社会を目指して

難民移住移動者 相談ダイヤル

☎ 06-6941-4999

アクセス

〒540-0004 大阪市中央区玉造 2-24-22

カトリック大阪高松大司教区事務局内



●公共交通機関ご利用の場合

JR 森ノ宮駅より 約 1000m

地下鉄中央線森ノ宮 2 番出口より 約 800m

JR 玉造駅より 約 1000m

地下鉄長堀鶴見緑地線玉造 1 番出口より約 800m

●車でお越しの場合

阪神高速 1 3 号東大阪線法円坂出口

法円坂交差点南へ上町を東へ

活動へのご支援ご協力をおねがいします

☐郵便振替 00960-7-61419

加入者名 カトリック大阪高松大司教区シナピス

代表役員 前田万葉

☐三井住友銀行 玉造支店 普通 9401958

カトリック大阪高松大司教区 シナピス

代表役員 前田万葉

☐オンラインはこちら →→→

